

報 告

脳と心のメカニズム第7回冬のワークショップ参加報告

北海道大学大学院文学研究科心理システム科学講座 柴田みどり

2007年1月9日から11日まで、北海道留寿都村において「脳と心のメカニズム第7回冬のワークショップ」が開催された。札幌から参加できるという地の利もあり、私は一昨年に続き、今回2度目の参加であった。このワークショップは「脳と心のメカニズム」の解明という壮大な目標に対して、関連する実験研究や理論研究に携わる研究者が垣根を越えて会し、議論を深めようという企画のようである。以下に本ワークショップについて、私自身の印象を交えた参加報告を記すことにするが、全セッションについて網羅していない点を最初にお詫きしたい。

今回のテーマは Neuroeconomics ということで、初日からカリフォルニア工科大学の Peter Bossaerts 博士と、アリゾナ大学の Alan Sanfey 博士による講演が行われた。Bossaerts 博士の講演は、報酬の予測とともに、リスクの予測を対象としたもので、非常にシンプルなカードを用いたギャンブリングタスクにおけるイメージングデータの結果は大変興味深いものであった。Sanfey 博士の講演でも、身近な場面を例にした意志決定など、イメージングデータを交えた大変説得力のあるものであった。2日目のトピックセッションや、夜のポスター発表においても、報酬や報酬の予測に関する神経基盤についての発表が多くみられ、今回のテーマである Neuroeconomics に対する、多様なアプローチが示されたように思った。

3日目のトピックセッションでは、私自身が言語理解について研究していることもあり、理化学研究所の岡ノ谷一夫先生の「言語起源の生物学的研究のための

シナリオ」と題した講演が特に印象深かった。2002年に発表された Hauser らの論文以来、活発化している言語の起源に対する研究の文脈の中で、今回の豊富なデータに基づく理論は大変説得力のあるものであった。岡ノ谷先生の講演や著作には、折に触れ接する機会が多かったが、今回、さらに最新のデータに基づくものが数多く盛り込まれ、まるで言語の起源についての理論に対して、ジグソーパズルのピースを埋めていくかのような感覚を覚えた。これらの講演に対しては、連日、フロアからも活発な質疑応答が行われ、このワークショップの質の高さを改めて感じさせるものであった。

講演のあとのポスター発表は、一転してビールやワインを片手に大変和やかな雰囲気の中で行われた。そのためか2時間という時間枠を越えて、夜遅くまで、異分野の研究者の方々から、貴重なご意見や示唆を得ることができた。ただ、こちらに異分野の研究に対する知識が乏しいことで、示唆を得たものの、そこから先の展開を考えると、どのように繋げていけるのかが難しいと思うことが素直な感想である。これには今後、地道にこのようなワークショップや学会に参加し、異分野の方々との交流を深めていくことが重要であると思う。ワークショップの合間には、初対面ながらも同室でお世話になった研究者の方々と一緒に、スキーを楽しむこともでき、早朝から深夜まで、中身の濃い充実した三日間であった。

最後にこのような質の高いワークショップを企画してくださった先生方に深く感謝致します。

脳と心のメカニズム第7回冬のワークショップ参加報告

琉球大学工学部 大城尚紀

2007年1月9日から11日までの3日間、北海道留寿都村ルスツリゾートにて恒例の「脳と心のメカニズム—第7回冬のワークショップ—」が実施された。直前には函館の街が浸水し、初日は留寿都村も荒れ模様の中であったが、2日目からは落ち着いた天候を得た。

今回はワークショップテーマを不確実な状況での意思決定を扱う Neuroeconomics としての実施であった。これは時に不合理になる人の意志決定の機構を脳機能イメージングなどを活用して解析しようとするものである。私自身は参加にあたって講演概要にざっと目は

通していたものの、新しい分野とのことでイメージを掴みかねている面もあった。スペシャルセッション2件は、Peter Bossaerts氏 (California Institute of Technology), Alan Sanfey氏 (University of Arizona) の講演であった。また、トピックセッション6件、ポスターセッション38件の発表が行なわれた。参加者数は92名であった。神経経済学ということで、報酬予測の例も数多く話題に出て、報酬とその意志決定の代表例としてギャンブルの話題のほか、嵐に遭遇するリスクの上でゲレンデに出るか部屋で温まるか、またネイチャーへの論文掲載を目指して研究を深めるか、他者からの研究発表を牽制して論文投稿するか、などの身近な(?) 話題もあった。

ポスターセッションでは、昨年度から掲示方向が縦長から横長に変更されており、広々とポスター掲示を行なうことができている。この変更により、以前のまるで祭の出店のような密集感からくる熱気は軽減した

が、夕方からのポスターセッションでは真剣な中にも楽しい雰囲気の中、ビール片手に熱心な討論が夜遅くまで行なわれていた。ただ、一昨年度・昨年度と約60件近くあった発表に対して、今年度は約40件と発表件数が少なく、多少物足りないような印象も受けた。

私は第3回ワークショップより参加させて頂き、毎回のテーマ設定と高度な講演・発表内容に勉強させて頂いている。本ワークショップのような泊まりがけの研究会にはそれまで参加したことがなく、以来、参加者の方々の研究へのバイタリティに非常に刺激を受けている。また、沖縄からの参加で、ゲレンデに出たのはこのワークショップで北海道に来てからがほとんど初めてであった。初年度は、自身の発表準備もあったため、部屋で過ごそうとしていたが同室の先生方に「ここへ来てそれは間違っているぞ!」とたしなめられ、初級スキー教室で転ぶところから始めた。貴重な経験をさせて頂きこの点でも非常に感謝している。